

機関番号：32617

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730348

研究課題名（和文） 観光と政治——戦前期における中国人の「満洲」ツーリズム

研究課題名（英文） Tourism and Politics: Chinese Tourism in Prewar Manchuria

研究代表者

高 媛（KO EN）

駒澤大学・グローバル・メディア・スタディーズ学部・講師

研究者番号：20453566

研究成果の概要（和文）：

本研究は日本語と中国語双方の史料を用いて、戦前期における中国人の「満洲」観光の実態と意味を解明したものである。戦前における中国人の満洲観光は、満洲国建国（1932年）を境にした満鉄主導時代（1906～31）と満洲国時代（1932～45）に区分することができる。この二つの時代における中国人観光に対する意味づけも、娯楽を通じた「日中親善」から「五族協和」の国民創出へと、大きく転換していた。

研究成果の概要（英文）：This research examined the history of Chinese tourism in prewar Manchuria by analyzing both Japanese and Chinese tourism materials. Before and after the turning point of Foundation of Manchukuo in 1932, the history of Chinese tourism in Manchuria can be divided into two different periods, the South Manchuria Railway Company-driven period (1906-31) and Manchukuo period (1932-45). The meaning in promoting Chinese tourism switched drastically from "Japan-sino Friendship"(Nicchu Shinzen) to "Harmony of the Five Ethnic Groups" (Gozoku Kyowa), the latter emphasized the importance of inventing a new national identity of Manchukuo.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：満洲、観光、空間認識、帝国、植民地、モダニティ、戦争、メディア

## 1. 研究開始当初の背景

観光研究は主として観光人類学の分野で行われてきた。観光人類学では、一般的に、

観光現象を「ホスト」（観光客を受け入れる社会）と「ゲスト」（観光客）の関係性のみで捉えている。これまで両者を検討する際、

多様な観光関係の組織集団や個人に対して、「文化のブローカー」や「境界人」、「文化仲介者」などの概念が導入され、分析されてきた。いずれの概念も、帝国と支配地・植民地の間に広がる不均衡な権力関係については看過されており、植民地観光が置かれた複雑な位相は捨象されている。

本研究では、満洲にたたみ込まれた帝国の権力性とコロニアルな歴史背景をふまえたうえ、「代理ホスト」という分析概念を提示したい。「代理ホスト」とは、本来の「ホスト」に取って代わり、ゲストの受け入れを一手に収め、ホスト社会の「観光資源」を帝国のまなざしで発見・解釈し、そして価値付ける「権威の潜在的代行者」を意味している。

なお、これまで、筆者は博士論文を含む一連の研究成果の中で、ゲスト（日本人内地客）／代理ホスト（在満日本人）／ホスト（現地人）の三者間を繰り広げられた重層的な権力関係について分析してきた。それを踏まえ、本研究では、ゲスト・被植民者の二重の身分を持つ在満中国人と、在満日本人や一部の中国人エリートが担う「代理ホスト」との間で繰り広げられた相互交渉の動態を明らかにする。こうした作業は、これまで平面的・固定的に捉えられがちな植民者／被植民者の関係性を、より立体的かつ可変的に描き出すための手がかりを提供することになる。

本研究では、観光を近代的娯楽であると同時に、国民国家の空間認識を形成させるための装置として両義的に捉える。観光が持つ両義性への着目は、観光を行った中国人の日常生活を浮き彫りにするだけでなく、そこに埋め込まれていた政治性を明らかにすることになる。こうした政治性の解明は、満洲で作動していた権力の実態を浮き彫りにし、満洲社会の新たな側面を提示することになる。

戦前における中国人の満洲観光は、満洲国

建国（1932年）を境にした満鉄主導時代（1906～31）と満洲国時代（1932～45）に区分することができる。この二つの時代における中国人観光に対する日本側の意味づけも、娯楽を通じた「日中親善」から「五族協和」の国民創出へと、大きく転換していた。一方、1930年、中華民国政府は、満鉄が盛んに行っていた内地客誘致に対抗して、満洲以外の中国人客向けの「東北旅行」キャンペーンを計画していた。つまり、日中双方は、観光客の身体を国民の身体として動員し、領土の存在を実感させるという、共通の思惑を有していた。

## 2. 研究の目的

まず、満鉄主導時代（1906-1931）においては、中国人の満洲観光はいかなる矛盾を抱えていたのかを明らかにすることである。この時代に、満鉄は「アメとムチ」を併用し、観光用地をめぐる現地住民と対立する一方、中国人有力者のパッケージツアーを斡旋したり、一般中国人の寺廟参拝団に対して割引乗車券を発行したりするなど、近代的娯楽としての観光を満洲社会に成立させた。ここでは、特に観光をめぐる日中対立の象徴的な出来事として、1930年、中華民国政府が満鉄の旅行策に対抗するために計画した「東北旅行」キャンペーンを精査し、その意味を検討することで、満鉄主導時代の中国人観光が抱え込んだ矛盾の実相を浮かびあがらせる。

次に、満洲国時代（1932-1945）においては、新興国家の空間認識を形成させる装置として、中国人観光がいかに組み込まれたのについて解明することである。具体的に、中国人観光団を誘致する満洲大博覧会の開催や、中国語観光バスの増設、満洲族史蹟の保存開発、「祖国認識運動」キャンペーンなどに着目して明らかにする。

### 3. 研究の方法

まず、日本の国会図書館、滋賀県立大学図書館をはじめ、中国東北地方及び北京の各図書館で、満鉄関連機関の満蒙文化協会発行の中国語雑誌『東北文化月報』（1921年創刊）と、満洲で最も長く発行された漢字新聞『盛京時報』（1906～44年）に掲載された関連記事を読覧し、満鉄主導時代における中国人観光に関する満鉄・満蒙文化協会側の取り組みと、満洲社会に与えた観光の影響を解明した。また、海外調査中、東北師範大学、大連大学と大連理工大学の満洲研究者と積極的に意見交換も行った。

次に、二つ目の課題である満洲国時代の中国人観光の考察に取り組むために、満洲国時代の関連文献資料として、大衆雑誌『月刊満洲』（日本語、1933～45年）、観光雑誌『旅行満洲』（日本語、1934～44年）をはじめ、中国語大衆雑誌『新満洲』（1939～45年）、文芸雑誌『麒麟』（1941～45年）を調査し、満洲国時代の中国人観光の特徴と実態や、日本人の満洲観光との関連について考察を行った。

戦前期に発行された中国語・日本語の新聞・雑誌記事以外に、満洲時代に刊行された中国語の旅行パンフレット、ガイドブック、絵葉書といったビジュアル資料にも注目し、資料のデータベース化作業を進め、研究に活用するためのデジタルデータを作成した。

### 3. 研究成果

(1) 基礎資料のデジタル化については、満鉄をはじめ、ジャパン・ツーリスト・ビューロー大連支部、満蒙文化協会、満洲事情案内所などが発行した中国語の旅行パンフレットをスキャンし、ビジュアル資料のデジタルデータを作成した。

(2) 現地調査については以下のような成果が

ある。国内では国会図書館や滋賀県立大学、神戸大学などで、満洲時代の日本語新聞と雑誌を調査し、中国では大連市図書館、長春市図書館及び中国国家図書館で、中国語の新聞雑誌とパンフレットなどを閲覧した。また、海外調査中、東北師範大学、大連大学と大連理工大学の中国人研究者と意見を交わした。

(3) 論文については以下のような成果がある。中国人の満洲観光と相補的關係にある日本人の満洲観光について、「大連新聞』（1920～35年）主催のメディア・イベント「満洲八景」を手がかりに、日本語メディアと観光イベントとの関係性を明らかにした。その成果は論文「租借地メディア「大連新聞」と「満洲八景」』としてまとめ、『Journal of Global Media Studies』（第4号）にまとめた。

また、満洲観光の原点にあたる1906年夏に実施された大規模な修学旅行の経緯を明らかにした。その成果は論文「戦争が生み出した観光——日露戦争翌年における満洲修学旅行」』としてまとめ、『Journal of Global Media Studies』（第7号）に発表した。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 高 媛、「租借地メディア『大連新聞』と『満洲八景』」『Journal of Global Media Studies』、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、査読無、第4号、pp. 11-23
- ② 高 媛、「戦争が生み出した観光——日露戦争翌年における満洲修学旅行」、『Journal of Global Media Studies』、駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、査読無、第7号、pp. 11-30

〔その他〕

駒澤大学図書館駒大電子紀要検索 [http://  
www.lib.komazawa-u.ac.jp/](http://www.lib.komazawa-u.ac.jp/)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高 媛 (KO EN)

駒澤大学・グローバル・メディア・スタ  
ディーズ学部・講師

研究者番号： 20453566